将来の夢

八南小・6　本島　悠善

夏休みの生活作文の題に「将来の夢」とあったけれど、正直に言うと、今のぼくには「これに絶対なりたい」という夢はありません。でも、夢がないからといって書けないわけではなく、ぼくには夢を考えるきっかけになった出来事や、今の気持ちがあるので、それを書いてみようと思います。

ぼくが今まで一番がんばってきたことはバスケットボールです。小学校一年生の時、今も仲の良い友達が

「いっしょにバスケやってみない。」

と声をかけてくれました。最初は「やってみようかな」くらいの気持ちでした。体験に行った時は、ドリブルもうまくできず、ボールも思った方向に飛びませんでした。でも、みんなで練習したり、走ったりすることが楽しくて、「もっとやってみたい」と思うようになりました。そこから、ぼくのバスケット生活が始まりました。その友達とは今も同じクラブチームでバスケをしています。お互いにキャプテンと副キャプテンを任され、チームを引っ張っていく立場になりました。練習の時に声をかけ合ったり、作戦を相談したりしながら一緒に成長してきたことは、ぼくにとって大きな支えです。仲間とともに頑張る楽しさや責任を学べたのもバスケットを続けてきたからだと思います。

学年が上がるごとに、少しずつできることも増えてきました。最初はシュートが全然入らなくて悔しかったけれど、練習を続けるうちにリングに入る回数が増えていきました。試合に出て点数を決められたときは本当にうれしかったです。その分、思い通りに動けず負けてしまった時はとても悔しくて、もっと上手になりたいと強く思いました。バスケットをしていると、楽しさと悔しさの両方を体験できるので、ぼくはますますバスケが好きになりました。

四年生のころ、家族やクラブチームのみんなとプロの試合を観戦しに行ったことがあります。プロのスピードや迫力、会場の熱気に圧倒され、「いつか自分もあんな場所に立ってみたい」と強く思いました。その気持ちがつながったのは六年生の春。三遠ネオフェニックスの前座試合の出場が決まりました。あの時、憧れていた舞台に自分が立てたことが本当にうれしかったです。プロの選手たちがプレーしていたコートで自分も走り、仲間と試合ができたことは、忘れられない思い出になりました。

そのころ、ぼくの夢は「プロのバスケット選手になること」でした。試合でのプレーを思い出しながら、自分もあんな風にかっこよくプレーできたらいいな、と考えていました。けれど、練習や試合を重ねていくうちに、「本当に自分がプロになれるのかな」と思うようになりました。プロになるためには、体格や才能、すごい努力が必要だとわかってきたからです。そんな時、ほかの夢を考えようとしました。でもすぐに「これになりたい」と思えるものは見つかりませんでした。そこでお父さんに、

「夢って絶対にもたないとダメなの。」

と聞いてみました。するとお父さんは、

「大人になっても夢を追い続けている人はたくさんいるよ。楽しみ

ながら興味をもって探し続けることが大切だよ。」
と言ってくれました。その言葉を聞いて、ぼくはハッとしました。
確かに、まだ小学生です。中学生になれば新しい友達や先生との出会いもあるし、部活動や勉強を通して、今は知らないことをもっと知ることができると思います。高校生になれば、さらに自分の世界が広がってやりたいことが見つかるかもしれません。今はまだはっきりした夢がなくても、いろいろなことに興味をもちながら、自分に合った夢を見つけられたらいいなと思います。
だから今のぼくの「将来の夢」は、「自分の夢を探すこと」です。夢を見つけるためにこれからもバスケットを続けながら、勉強やほかのことにもチャレンジしていきたいです。いろいろな経験をすることで、「これだ」と思える夢に出会えるかもしれません。その時のために、少しずつ努力して成長していきたいと思います。
将来の夢はまだ決まっていないけれど、夢を探している今の気持ちを大切にしていきたいです。そしていつか、自信をもって「これが自分の夢です」と言える日が来ることを楽しみにしています。

7・9